

II 研究編

中華帝国の財政と東アジアの銀流通

丸橋 充拓

はじめに

16世紀前半、石見国大森に端を発する銀の奔流は、こののち1世紀におよぶ銀ブームの先駆けとなった。そして世界を席卷した銀の大量流通から最大の恩恵を受けたのが、中国に他ならない。したがってこの問題は、中国史研究においても古くから大きな関心が寄せられたテーマであり、1980年代以前にはすでに賦役制度研究、商業・商人研究、貨幣史研究、対外関係史など、さまざまな分野で蓄積が進められた。ただしこの時期の研究は、こうした諸分野の成果が個別的に並存するにとどまっていた。また、賦役制度研究には搾取構造の解明、商業・商人ないし貨幣史研究には資本主義萌芽や商品経済の検出など、史的唯物論の実践意識が深く刻まれていたし、対外関係研究ならば近代国民国家を歴史主体の単位とする一国史観（国民国家史観）が前提とされるなど、各分野における同時代的問題関心に強く規定されていたことが、今日明白となっている。

これに対し、1990年代以降の研究はその方向性を大きく転換する。西洋史・日本史・東南アジア史において先行していた「海域」概念の重要性が中国史においても認識され、16～17世紀の東アジアでおこった共時的現象を、貨幣流通を軸に総体として把握する姿勢が共有されるようになったのである¹。

こうした研究により、国家の枠組を取り払った展望が今日徐々に開けつつあるが、石見をはじめとする外来銀の中国流入後の流れ、すなわち窓口となる浙江・福建・広東沿海域から北辺に至るまでの物流構造は、必ずしも体系として整理されてきていない。後述するように、外来銀を最終的に引き寄せる磁場は、「北辺」にあった。ならば、外来銀を引き寄せていたのは「中国」ではなく「北辺」であった、として議論を再構築してみてもどうか。それは一国史観を越える展望を得るための意義ある試みとならないだろうか。本稿では、そうした問題意識のもと、北辺に至るまでの銀の流れを、財政過程上の分節構造を見据えながら把握することで、「地域としての北辺の動向」が「国外の銀流通」といかなる連動関係にあったのかについて探っていきたい。

1 16世紀における明国内の銀流通

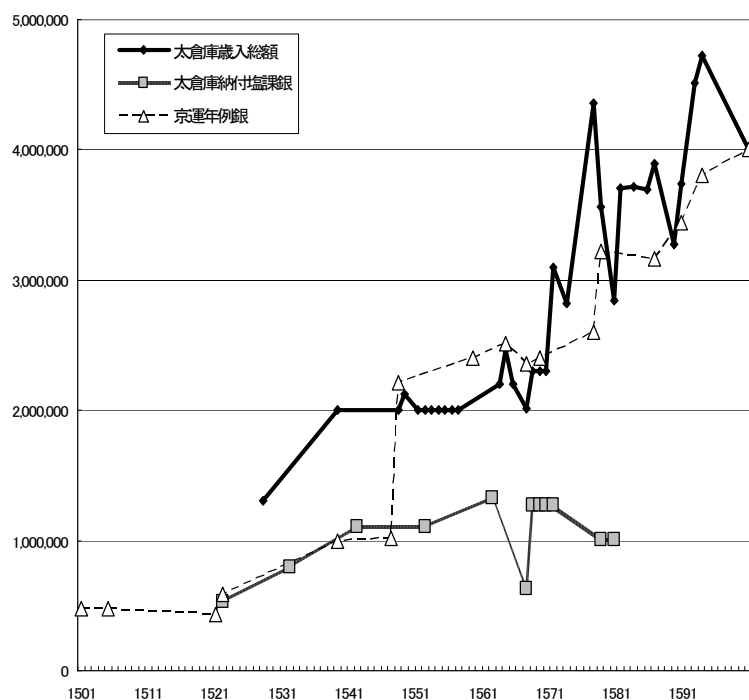
よく知られているように、石見銀の中国流入は16世紀中葉に本格化する。だが、なに

1 中国専制国家が組織する「国家的物流」の規定性を中国国外にも適用した足立啓二氏、これに異を唱え銅銭信認根拠の中華帝国からの自律性を説く大田由紀夫氏、市場原理によらずに流通する貨幣のメカニズムをさまざまな時代・地域・幣種から解き明かした黒田明伸氏など。これらを含め、15～17世紀における東アジア海域史研究の現時点での到達点は、岸本美緒 1998b、上田信 2005、桃木至朗 2008a により、端的にうかがうことができる。

ゆえこの時期に、なのであろうか。銀の大量流入が起こるには、中国国内における銀需要の高まりと、需要する者に銀を届けうる物流構造の存在が条件となるだろう。したがって石見銀がこの時期中国に受容されていく背景を探るに当たっては、こうした条件がどのように醸成されていったのかを探ることが捷徑と思われる。

まず銀需要の動向であるが、これを端的に示す統計として下にグラフを掲げる。これは国家財政の中心的な財庫である太倉について、その歳入総額、各地から太倉に納入される塩課銀（塩の専売収益に対して請負商人に課される税）額、そして大規模な防衛部隊が展開する北辺に対し太倉から毎年支給される京運年例銀の額を表示している²。このうち、塩課銀と京運年例銀はそれぞれ太倉財政において最大の歳入・歳出項目である³。つまり国家財政における「代表的な出入り」を読み取ることが、本グラフのねらいである。

16世紀太倉の主な収支統計



各項の時間的推移をたどれば、1530-40年代、1570年代付近に銀需要の昂進が認められる。前者は石見銀の流入開始期、かつ後期倭寇やアルタンの侵入などによって軍需の高まった時期でもある。また後者のころには、スペインの参入により中南米銀の流入が始まっている。これらから、明国内の銀需要は16世紀の国際情勢と密接に連動しつつ、急速に高まっていたことがうかがえよう。

² 歳入総額は全漢昇 1996a・238-249頁の第一表、塩課銀額は同254-255頁の第四表、京運年例銀は全漢昇 1996b・289-292頁の第四表を参照。

ついで、外来の銀がどのような物流構造のもとで明国内に浸透していったのかについて、全体像を復原していこう。16世紀中葉における銀の流れは、次の4過程に分節できる。以下では、これに即して具体的な動きを跡づけていく。

- (1) 海外から流入し、民間に流通する過程
- (2) 国家により徴収される過程
- (3) 国家により輸送される過程（主に首都・北辺）
- (4) 国家により放出され、民間に還流する過程

(1)の過程を主として担うのは、16世紀に台頭した徽州商人（新安商人）である。彼らは隆慶元年(1567)に海禁が解除される以前には倭寇の主力を構成していたとされるが、その前後を通じて、海外貿易に牙行として従事し、内外の流通過程を架橋する役割を担った⁴。浙江・福建・広東沿海域からもたらされた銀は、彼らの手で国内に持ち込まれ、各段階の民間流通過程に入り込んでいくことになる⁵。

(2)は国家が銀を取得する過程であり、(1)において民間に流通した銀を徴税等により収取する、あるいは朝貢貿易を通じて国外から直接入手する等の経路が考えられる。前者にはさまざまな課徴が設けられていたが、重要なものとしては、一般民が税糧を折銀（銀による代納）して納入する「金花銀」⁶、華北諸州に対する「民運糧」（北辺への運送を課された軍糧）の折銀納入、塩の専売収益に対して課される税（塩課銀）を請負商人が各地の塩運司に納入する「運司納銀」が挙げられる⁷。

こうして徴収された銀は、(3)の過程で支出先あるいは備蓄先に輸送される。上の三者について言えば、金花銀は北京の内承運庫へ送納され、宮廷費用等に供される⁸。万暦6年(1578)の統計ではその年100余万両が同庫に納められたという⁹。民運糧の折銀は上記の通り北辺に送納され、駐屯部隊の経費に用いられた¹⁰。塩課銀は、塩運司の手で北京の太

3 岩見宏、全漢昇 1996a・253頁。

4 藤井宏 1953b・197-203頁。

5 藤井宏 1953c。

6 星斌夫 1978。

7 寺田隆信 1972（第一章「北辺における軍事的消費地帯の経済構造」）

8 星斌夫 1978・13頁および20頁を参照。

9 岩見宏 1989 および同論考で紹介された『万暦会計録』の統計（特に287頁の表）を参照。

10 寺田隆信 1972・37-43頁。

倉へ転送され、一旦ストックされる。万暦6年には101万余両が納入されており、太倉における銀ストックの最大の財源であった¹¹。そしてここから「京運年例銀」と呼ばれる銀が北辺に送られた。万暦6年の送付額は322万余両である¹²。

(4)は換言すれば支出過程であるが、中華帝国の財政において歳出の大部分は軍事費で占められる。16世紀の明の場合、民運糧折銀や京運年例銀の形で北辺にもたらされた銀がこれに該当し、市糶（穀物買い上げ政策）の対価や兵士の給与に用いられた。銀は、市糶政策や兵士たちの日常的消費活動を通じて民間に還流する。同じように、国家から給与を受け取る官僚等の北京における消費も、民間へ銀が還流していく重要な経路となった。こうして華北において放出される銀の受け皿となったのは、特に山西商人たちであった¹³。

以上より、官民双方がこの物流構造に参加し、銀を各地にもたらしていたことがうかがえる。とくに当時最大の銀消費地である北京や北辺に銀が浸透するに当たっては上記(3)の過程、すなわち財政運輸の役割が不可欠であった。16世紀後半、海外からもたらされる銀は30~40万両とされるから¹⁴、100万両のオーダーで推移する財政運輸の重みは、物流構造のみならず流通量の面からも、無視できないものがある。外来銀は、財政運輸という強力な「ポンプ」を備えた物流構造のもと、南北中国に広まることが可能になったわけである。

2 辺餉政策のあゆみ

前章で論じたとおり、外来の銀は、首都および北辺をめざして輸送される。かかる大規模な財政運輸の編成は、実は明朝だけの問題ではない。北に遊牧国家との火種を抱える中華帝国にとって、外敵と対峙する北辺防衛軍の扶養はつねに最重要課題でありつづけた。しかも大規模な消費人口（官僚・兵員）を抱える華北は農業生産力が相対的に弱い。したがって南の富を輸送して補給に充てる「辺餉政策」に膨大なエネルギーを傾注していくことになる¹⁵。前章で概括した銀の物流構造も、辺餉を維持するために歴代王朝が育んできた運輸編成の遺産を継承したものであった。そこで本章は、16世紀に至るまでの財政運輸の展開をたどっておきたい。

財政運輸の南北縦貫は、8世紀、募兵制が採用された唐代中期に起源をもつ。多大な労力を要するこの事業を維持するため、こののち歴代王朝はおおよそ以下のような複数の便

11 岩見宏 1989・287頁。

12 全漢昇 1996b・289-292頁の第四表を参照。

13 寺田隆信 1972（第三章「北辺における米穀市場の構造と商業利潤の展開」）。

14 von Glahn 1996,p.134,Table9.に掲げられた数値を両単位に換算。

15 宮澤知之 1998（特に終章「貨幣経済の時期区分」）・丸橋充拓 2006（特に第5章「軍糧輸送と『財政的物流』」）。

法を組み合わせていくこととなる。

まず第一に辺境における現地自給を振興すること。国家直営の屯田を拡充することが政策の基軸であったが、一般の民田に対する課徴からも軍費調達は図られた。第二に、軍需物資を国家の手で他地域から官運すること。輸送の担い手は、徭役労働、雇傭労働、あるいは兵員・罪人の駆使等で確保された。そして第三に物資（主に軍糧）を現地で買いつける市糴政策。これには商人に送納を委託し対価を給する方法と、在地農民に出売ノルマを課す方法があった。

これらのうち、現地自給には農業生産力の低さや外敵侵入の危険性といった限界があり、官運はコストが高くつくことから、商人を誘致する方法が次第に重視されるようになっていく。はじめ唐代には、軍糧輸納者に官秩を授与する、あるいは買取価格を時価より高く設定する等の素朴な方法が採られたが、北宋以降洗練の度を深め、納付の見返りに市場性の高い各種の手形（鈔）を北辺で発給する方法（入中法・開中法等、さまざまな呼称でよばれる）が開発されていく。最も代表的なのは、指定地における専売塩の請負販売を特許する塩鈔（塩引）の発給であった。

かくして歴代王朝は、「南から北へ」貫かれる大規模な物流編成の経験を蓄積していった。財政運輸の編成に先鞭をつけた唐、開封を結節点に南北を結んだ北宋、長江沿岸の4総領所それぞれを帰着点とする複合的な南北物流を編成した南宋、南京から北京へと都を遷した明¹⁶——それぞれ事情は異にしつつ、鈔を軸に上記三種の便法を組み合わせる辺餉政策は一貫して推進されたのである。

本稿で考察対象としている明代の場合、15世紀前半までは現地の屯田糧、華北諸州から輸送される民運糧、開中法のもと塩商人が納入する軍糧（在辺納糧）、という3種が辺餉の柱として採用されていた¹⁷。つまり北辺の軍需は現物の形でまかなわれていたことになる。

ところが、ときあたかも銀財政への転換が進むなか、その構成にも変化が現れる。まず輸送負担を理由に民運糧が厭われるようになり、銀による代納（折銀）が正統年間（1436-1449）に始められる。つづいて15世紀末になると開中法において辺境に軍糧納入する在辺納糧方式がこれも輸送の労から廃止され、塩課銀を各地の塩運司に納入すれば塩鈔が給付されるという新制（運司納銀制）が、弘治5年（1492）に施行された。つまり、第1章で紹介した「民運糧の折銀」と「京運年例銀」を柱とする16世紀の銀送付体制は、民運糧や在辺納糧など現物直輸体制に代わって採用されたものなのであった¹⁸。

16 唐代については荒川正晴 1992・丸橋充拓 2006、宋代については斯波義信 1988・西奥健志 2001・同 2006・長井千秋 2008、明代については藤井宏 1953・星斌夫 1962・寺田隆信 1972 を参照。なお北来政権の元朝にはそもそも辺餉問題が存在しないが、銀を核とする物流編成はモンゴル帝国全体の統合に重要な役割を果たしていた（安部健夫 1972・愛宕松男 1973・杉山正明 1995・高橋弘臣 2000）。

17 寺田隆信 1972（第一章「北辺における軍事的消費地帯の経済構造」）。

18 藤井宏 1953b・183頁、寺田隆信 1972・83-87頁、佐伯富 1987・463-474頁。

3 銀の北辺流入

これまでの研究によれば、中国において銀使用が大きく進展しはじめるのは 12 ないし 13 世紀、南宋・金のころからとされる。南宋においては当初から主に財政の場における重要性の高まりが見られたが、その後、会子の信用喪失にともなってさらに広く信認されるようになっていったという。13 世紀の金でも同様に紙幣や銅銭の価値下落に合わせて銀の使用が広まっていく¹⁹。元になると、中国内地では紙幣のみが行用されたものの、西域との通商に銀が用いられ、さらに銀の価値尺度機能も拡大したという²⁰。つづく明の場合、初期には徹底した現物主義をとるものの、すでに銀は幅広い貨幣的機能を保有するようになり、15 世紀になると次第に銀経済へと移行していく。つまり 16 世紀の「銀の時代」を待たず、銀の使用は中国国内に着実に浸透していたことになる²¹。

こうした経過と先述した辺餉の展開と突きあわせたとき、気づくのは、銀流通に関わる一般的状況とは対照的に、辺餉政策においては 15 世紀まで銀がほとんど介在してこなかったことである²²。そしてこの状況は、前章で考察した 15 世紀末の財政運輸改革によって大きく転換する。それまで銀のほとんど流通していなかった北辺は、これを契機としてにわかにはその奔流にさらされることになるのである。

では、この転換は「国外の銀流通」と、いかなる連動関係を持つことになるのだろうか。従来の研究では「銀への転換」、つまり外来銀流入の誘因としての面に注目が寄せられてきた。では「鈔からの転換」だったことの意味合いは、どう評価されうるだろうか。「変化」の意味は「それ以後」だけでなく「それ以前」を語ることでより鮮明になる。そこで以下ではこれまでの議論と少しく視点を変え、500 年の歴史を有する「鈔を介した財政運輸」を基点に、「北辺の動向」と「国外の銀流通」の関係を考察してみたい。

12 世紀以来、徐々に根を下ろしていた銀が、15 世紀末に至るまで辺餉政策の中心とならなかったのはなぜか。反対になぜ鈔なのか。もちろん銀の希少さという側面は無視できないが、それだけだろうか。

手ごかりは、銀と鈔の間に位置する貨幣、これまで本稿で言及してこなかった銅銭にあるように思われる。歴代王朝は銀以上に流通量の多い銅銭も、辺餉政策にほとんど参加させていない。それは「重くてかさばるから」としばしば説明されるが、本質的な理由とは思われない。銅銭はたとえ海外であっても、しかも大量に持ち出されうるのだから。条件さえ整えば、重さも距離もあったものではないのである。

19 von Glahn 1996, pp.56-57、高橋弘臣 2000・123-132 頁。

20 安部健夫 1972、愛宕松男 1973、高橋弘臣 2000。

21 足立啓二 1990c・100 頁。

22 南宋において、塩鈔購入の対価に一定割合の銀を含めることが求められたこと、兵士の給与にも一部銀支給が定められていたことなどが明らかにされているが（高聡明 1999・74-76 頁）、基本的には会子が用いられていた。

銅銭が辺餉政策に用いられないより重要な理由、それはむしろこの「持ち出され」てしまうことにこそ存するのではないだろうか。正貨流出は、貨幣不足（いわゆる銭荒）に直結するとして、歴代王朝がつねに神経を尖らせてきた。彼らは、辺境での銅鋌開発禁止や銅禁（銅の流出禁止）といった伝統的な政策、さらには縁辺諸路における鉄銭専用区設定（宋代に実施）など、さまざまな措置を講じて銅銭の流出防止に努めてきた。したがって辺餉政策に銅銭を参加させ、辺境に銅銭を流通させることの危険性は十分認識していたはずである。

それでは、なぜ鈔が用いられるのか。通常の説明では「軽量さ」「低コスト」「客商を辺境に誘導できる」といった面が強調される。しかしながら「流出しやすさ」という銅銭の一面と対比したとき、これらとは異なる鈔の特性が浮かび上がってくる。塩・茶など専売品の販売権を保証する手形としての鈔は、いうまでもなく通用地域が指定されている。北辺で鈔を手にした客商は指定地に赴かなければ利を得ることができない。鈔は「客商を内地に還す」機能を有するのである。仮に鈔が第三者の手に渡ったとしても、最終的には指定地で行用される。また、たとえ通用地域や通用期間等のくびきを脱し紙幣化した鈔（南宋の会子、金・元の交鈔、明の宝鈔等）であっても、外部勢力には受領されず、内地に還流するほかない。

鈔は必ず内地に還流する——このことは一見当たり前のようだが、「北辺の動向」と「国外の銀流通」の連動性を探るといふ本稿の課題にとって、ひとつの重要な示唆を含んでいるように思われる。越境して外部に流出することがない鈔の活用は、結果的に貨幣流出を抑止し、辺境地帯と外部の遮断を容易ならしめるからである。

「流出する銅銭」と「還流する鈔」、とりわけ宋代の貨幣政策は両者の均衡点を模索するものであったと評することができるかもしれない。そして、本稿で取り上げている明代の場合、この構図を「銀と鈔」の関係に置き換えることが可能である。

前章でも触れたように、15世紀前期までの辺餉は屯田糧、民運糧、開中法に基づく在辺納糧を柱とする現物中心の体制を布いていた。北辺で流通するのは現物が中心であり、他方、発給された鈔は販売指定地に還流するため、現地民や客商が外部勢力と通交する動機の乏しい状況が生み出されている。まことに海禁の国是と親和的な政策といいうる。

ところが15世紀末の財政運輸改革以後、北辺には大量の銀がもたらされるようになった。銀は、いうまでもなく中華帝国の枠を越え通用する。となれば、封印されていた「越境と通商」の動機づけが、現地民・客商と外部勢力の間で、それまでとは別次元の高まりを見せることは想像に難くない。銀供給が北辺における通商の要請を高め、それがさらなる銀需要をうむ。そしてそれは供給元の東南沿岸域にまで波及する。北ではモンゴルが、南では徽州商人が蠢動し²³、アルタンと王直は武力をもって海禁政策に挑みかかる。そして隆慶元年(1567)、ついに海禁が放棄され、「南の壁」が取り払われると、さらなる銀の奔流が北辺まで及ぶ。かくして北辺は「国境」なきがごとくに内外の軍閥が入り乱れ、経

23 藤井宏 1953b・183-184 頁、佐伯富 1987・463-487 頁、大田由紀夫 1998・24 頁、上田信 2005・187-188 頁。

済活況を謳歌する時代を迎えることとなる²⁴。

16世紀に起こった「越境と通商」のかくも劇的な変化は、煎じ詰めれば「鈔と銀」という媒介物の種差において、すでに胚胎していた。いわゆる北虜南倭の同時性を、「銀流入」という同根現象から説明することが近年増えているが²⁵、その「銀流入」の導火線にはそもそも15世紀末の財政運輸改革のおりに着火が行われていたのであった。

おわりに

15世紀末の財政運輸改革以前、現物中心の物流構造下にあった北辺において、銀流通は内地と比べて格段に小規模であった。そうした地域でありながら、毎年供給すべき物資はどこよりも多かったわけである。当然、「鈔から銀へ」転じたときの銀流入量はどこよりも大きい。したがって財政運輸改革後の銀インパクトは、内地とは比べものにならなかったことであろう。鈔の使用によって域外との通交が制約されていた北辺は、ここにおいて南北双方の窓から一挙に世界の銀流通と連結されることとなった。「北辺の動向」と「国外の銀流通」は、「鈔から銀へ」の転換によって直接連動するようになったのである。

A.G.フランク氏は18世紀以前の中国に「世界経済」の中心との評価を与えるが²⁶、近代国民国家の枠組を取り払って中国国内の物流構造まで分け入ってみれば、少なくとも16世紀については、北辺における財政運輸改革こそが、世界の銀を引き寄せた直接の引き金であったことが判明する。そしてこの激変ぶりからは、「国境」を容易に越えて展開する銀という貨幣の特性も改めて確認されよう。

以上のように貨幣流通を題材とした研究からは、一国史観・国民国家史観を相対化する好個の視点を得ることが可能である²⁷。国民国家や特定地域等に歴史空間を特化することの限界が明らかとなっている今日の研究水準に照らせば、国家や自治体、あるいは地域コミュニティに保存活動の基礎をおく文化遺産にあっても、探求テーマに相応しい歴史空間をそのつど柔軟に設定し、歴史的評価を探っていくことが今後は求められよう。

24 岩井茂樹 1996・634頁、同・642頁、谷口規矩雄 1996、和田正廣 1984・1985 など。

25 岸本美緒 1998b。

26 フランク 2000。

27 その一方で、貨幣をめぐる公権力と大商人の関係の差異（「財政運輸という国家事業に寄生する中国の商人」と「諸大名への貸付が日常化している日本の商人」）のように、国制のちがいによる国家間の比較研究が有効な論点も見出しうる。藤井宏 1954、寺田隆信 1972（第三章「北辺における米穀市場の構造と商業利潤の展開」）、本多博之 2007・156-160頁を参照。なお黒田明伸 1994・135-141頁は、財政における債務の有無を基準に分類された日本・西欧型、ムガール・オスマン型、中華・朝鮮型という3種の財政を、国制に照らしつつ比較検討している（寺田隆信 1972・174-176頁には、地方官府に貸付を行う山西商人の姿が紹介されているが、中華帝国の財政原則にあっては例外的な事例といえよう）。

参考文献

【日文】

- 足立啓二 1990a 「専制国家と財政・貨幣」（中国史研究会編『中国専制国家と社会統合』文理閣）
- 1990b 「明清時代における錢經濟の發展」（同上）
- 1990c 「初期銀財政の歳出入構造」（『山根幸夫教授退休記念明代史論叢』下、汲古書院）
- 1992 「東アジアにおける錢貨の流通」（『アジアのなかの日本史 III 海上の道』東大出版会）
- 安部健夫 1972 「元代通貨政策の發展」（『元代史の研究』創文社）
- 荒川正晴 1992 「唐の対西域布帛輸送と客商の活動について」（東洋学報 72-3・4）
- 池亨 2001 「前近代日本の貨幣と国家」（池亨編『錢貨－前近代日本の貨幣と国家』青木書店）
- 岩井茂樹 1996 「十六・十七世紀の中国辺境社会」（小野和子編『明末清初の社会と文化』京都大学人文科学研究所）
- 2004 「十六世紀中国における交易秩序の模索」（岩井茂樹編『中国近世社会の秩序形成』京都大学人文科学研究所）
- 岩見宏 1989 「晚明財政の一考察」（『明末清初期の研究』京都大学人文科学研究所）
- 上田信 2005 『海と帝国－明清時代』講談社
- 浦長瀬隆 2001 『中近世日本貨幣流通史』勁草書房
- 大田由紀夫 1995 「一ニ一五世紀初頭東アジアにける銅錢の流布－日本・中国を中心として－」（社会経済史学 61-2）
- 1997 「一五・一六世紀中国における錢貨流通」（名古屋大学東洋史研究報告 21）
- 1998 「一五・一六世紀東アジアにおける錢貨流通」（鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集 48）
- 2002 「『中世』東アジアの貨幣流通」（社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』、有斐閣）
- 愛宕松男 1973 「斡脱錢とその背景－十三世紀モンゴル＝元朝における銀の動向」（東洋史研究 32-1～2、『愛宕松男東洋史学論集 5』三一書房、1989 に再録）
- 加藤繁 1925 『唐宋時代に於ける金銀の研究』東洋文庫
- 1991 『中国貨幣史研究』東洋文庫
- 岸本美緒 1997 『清代中国の物価と經濟變動』研文出版
- 1998a 「東アジア・東南アジア伝統社会の形成」（『岩波講座世界歴史 13』岩波書店）

	1998b	『東アジアの「近世」』山川出版社
黒田明伸	1994	『中華帝国の構造と世界経済』名古屋大学出版会
	1999	「貨幣が語る諸システムの興亡」（『岩波講座世界歴史 15』岩波書店）
	2003	『貨幣システムの世界史—<非対称性>をよむ—』岩波書店
小葉田淳	1976	『金銀貿易史の研究』法政大学出版局
佐伯富	1987	『中国塩政史の研究』法律文化社
斯波義信	1988	「長江下流域の市糶問題」（『宋代江南経済史の研究』汲古書院）
島根県教委	1999	『石見銀山遺跡総合調査報告書 第4冊 歴史文献研究会編』
	2002	『石見銀山関係論集』
清水泰次	1935	「明代における租税銀納の発達」（東洋学報 22-3）
杉山正明	1995	『クビライの挑戦—モンゴル海上帝国への道—』朝日新聞社
高橋弘臣	2000	『元朝貨幣政策成立過程の研究』東洋書院
田口宏二郎	1999	「前近代中国史研究と流通」（中国史学 9）
谷口規矩雄	1996	「明末北辺防衛における債帥について」（小野和子編『明末清初の社会と文化』京都大学人文科学研究所）
寺田隆信	1972	『山西商人の研究』東洋史研究会
長井千秋	2000	「中華帝国の財政」（松田孝一編『東アジア経済史の諸問題』阿吽社）
	2008	「南宋の補給体制試論」（愛大史学 17）
西奥健志	2001	「北宋の西北辺における軍糧輸送と客商」（鷹陵史学 27）
	2004	「宋代市糶制度の財政的背景」（社会経済史学 70-3）
	2006	「宋代の物流と商人」（鷹陵史学 32）
日野開三郎	1982	「北宋時代における貨幣経済の発達と国家財政との関係についての一考察」（『日野開三郎東洋史学論集 6』三一書房）
藤井宏	1953a	「新安商人の研究（一）」（東洋学報 36-1）
	1953b	「同（二）」（東洋学報 36-2）
	1953c	「同（三）」（東洋学報 36-3）
	1954	「同（四）」（東洋学報 36-4）
フランク,A.G.	2000	『リオリエント』（山下範久訳）藤原書店（原著は 1998 刊）
星斌夫	1963	『明代漕運の研究』日本学術振興会
	1978	「金花銀考」（山形大学紀要・人文科学 9-1）
本多博之	2007	『戦国織豊期の貨幣と石高制』吉川弘文館
丸橋充拓	2006	『唐代北辺財政の研究』岩波書店

- 宮澤知之 1998 『宋代中国の国家と経済』 創文社
1999 「中国専制国家財政の展開」 (『岩波講座世界歴史 9』 岩波書店)
2002 「中国専制国家の財政と物流－宋明の比較－」 (第一回中国史学国際会議研究報告集『中国の歴史世界－統合のシステムと多元的發展－』 東京都立大学出版会)
2007a 『中国銅銭の世界－錢貨から経済史へ－』 思文閣出版
2007b 「日本における宋代貨幣史研究の展開」 (中国史学 17)
- 桃木至朗 2008a 『海域アジア史研究入門』 岩波書店
2008b 『歴史学のフロンティア－地域から問い直す国民国家史観』 (秋田茂と共編、大阪大学出版会)
- 和田正廣 1984 「李成梁権力における財政的基盤 (一)」 (西南学院大学文理論集 25-1)
1985 「同 (二)」 (西南学院大学文理論集 25-2)
- 【中文】
- 高聡明 1999 『宋代貨幣与貨幣流通研究』 河北大学出版社
全漢昇 1996a 「明中葉後太倉歳入銀兩的研究」 (李龍華と共著、『中国近代經濟史論叢』 稻禾出版社)
1996b 「明中葉後太倉歳出銀兩的研究」 (同上)
彭信威 1954 『中国貨幣史』 羣聯出版社
梁方仲 1940 「明代国際貿易与輸出入」 (『中国社会經濟史集刊』 6-2)
- 【欧文】
- Atwell, W.S. 1982 “International Bullion Flows and the Chinese Economy circa 1530-1650”, *Past and Present* 95
Hartwell, R.M. 1989 “Foreign Trade, Monetary Policy, and Chinese ‘Mercantilism’ ”
『劉子健博士頌寿記念宋史研究論集』 同朋舎
von Glahn, R. 1996 *Fountain of Fortune: Money and Monetary Policy in China, 1000-1700* : Univ. of California Press.